

もみじ

—広島県山岳・スポーツクライミング連盟会報—



一般社団法人 広島県山岳・スポーツクライミング連盟

〒733-0011 広島市西区横川町 2 丁目 4-17

電話・FAX (082) 296-5597

E-Mail: hgakuren@lime.ocn.ne.jp

URL: <http://hiroshima-gakuren.or.jp>

郵便振替口座 01380-6-37958

題字デザイン 今村みずほ

編集 西部伸也

本号内容

1. 登山教室 (2 年 5/11~12 鳳翫山・右田ヶ岳、1 年 5/19 木の宗山~松笠山) 報告
2. 比婆山国際スカイラン (5/25~26) 報告
3. 書籍『那須雪崩事故の真相—銀嶺の破断』紹介
4. 広島県高校総体登山競技 (6/1~2 県民の森) 報告
5. 中国五県自然保護研修会 (5/18~19 下関市) 報告
6. ひろしま山の日 (6/2 竹原市) 報告
7. 岳連短信

1. 登山教室報告

第 2 回 2 年生 5/11(土)~12(日)

登山形態: テント泊山行

山城: 鳳翫山・右田ヶ岳 (山口県)

人数: 11 名 (スタッフ含)

今回の 2 年生は歩荷訓練で鳳翫山へ。テント泊後、右田ヶ岳に移動して岩稜歩き・ロープワーク訓練を行って来ました。炎天下の中の行動でしたのでとても良い訓練ができました。

(指導部長 森本 覚)

『5 月岩稜歩行訓練、歩荷訓練を終えて』

(2 年生 小玉 靖視)

1 日目の東鳳翫山の歩荷訓練は水と共同装備を含め 17Kg を背負っての山行です。この気温での歩荷訓練は初めてで、水分は取っていたのですが、地蔵峠からの折り返しで左足がつってしまい、スタッフの方に経口補水液と岩塩をもらい、水 2L を捨て、コッヘルをスタッフの方に、魔法瓶を仲間に分担してもらいなどして 3Kg 荷を軽くし、皆さんにゆっくり登ってもらい、東鳳翫山の頂上にたどり着きました。後は下るのみで

したのでなんとかなりでしたが。この時期熱中症対策として塩分も十分に摂取するよう思い、今日スーパーで岩塩を買いました。

2 日目の右田ヶ岳での岩稜歩行訓練は登り、下りの岩場の連続で、手足全身を使い本当に良い練習になりました。また懸垂下降の練習と初めてロープで確保して岩を登るなど、本当にいい練習が出来たと思います。この日も歩く距離だけを考えて、テント泊だった事もあり、この日の最高気温などをチェックもせず、サブザックで荷物も軽いしと思い、水 1L と 500CC のポカリでいいだろうと軽く考えて右田小学校に行きました。朝は肌寒いぐらいで風も強く吹いていましたが、直登尾根ルート、勝坂尾根から勝坂本ルートに登る頃には太陽の光が強くなりました。前日の事を考え塩飴などで塩分は摂取していたのですが、今度は下山中に水が無くなる失態をしでかしてしまい、仲間とスタッフの方に氷と水をもらう事になりました。前日に続き自分は山行で気温、距離、行動時間など全体の事を何も考えず漫然と行動していたと気付きました。北アルプス遠征の前で良かったです。



(写真提供 松本 正和)

第2回1年生 5/19(日)

登山形態：日帰り山行

山城：木の宗山～松笠山

人数：11名 (スタッフ含)

1年生は2回目ということで前回より少し荷物を多くして少し歩く距離も伸ばしてみました。気候に恵まれたので計画より早めの行動がとれ全員無事歩ききる事ができました。

(指導部長 森本 覚)

『5月の山行を終えて』

(1年生 山根 厚介)

今まで荷物を担いで長距離を歩いたことがほとんどなかったのが今回の山行は不安でした。しかし当日はそれほど暑くならず風もあったため、かなり過ごしやすい天候で、思ったよりは楽に歩くことが出来ました。そうはいっても最後の松笠山からの下りが意外とこたえました。登りはこれ以上ないのだからもう終わったようなものだという思いがあり油断していました。足も限界に近かったのかもしれない。やはり最後まで気を抜いてはいけなと感じました。

また今回は記録係をやったり、パーティーの先頭に立って歩いたり初めてやる事が多く刺激的でした。天候をメモし忘れていたり、速すぎるペースで歩いたり反省点も数多くあり、今後改善していきたいと思えます。

とりあえず来月も落伍しないようにまた1か月間トレーニングに励みます。



(写真提供 松本 正和)

2. 比婆山国際スカイラン (5/25～26) 報告

5/25(土)9時～大会直前準備、17時～登山フェスティバル、5/26(日)9時30分～スカイラン開会式、15時役員解散

参加者：選手752名・役員200名

5/26 10時の気象状況 天候 曇り

スタート地点 (標高850m) 気温26.3度・湿度35%

烏帽子頂上 (標高1225m) 気温22.0度・湿度40%

成績 (各コース1～3位)

Aコース (18.5km) 男子

① 沈 在徳 (50) (大韓民国大邱広域市山岳連盟) 1時間49分6秒

② 平木 達也 (36) (立ち上がれ!比婆ゴンマン!福山市) 1時間52分12秒

③ 池本 大介 (33) (自衛隊米子) 1時間52分22秒

Aコース 女子

① 山本 愛 (31) (美女とおやじ 吉備中央町) 2時間12分53秒

② 坂根 三保 (44) (広島市南区) 2時間19分59秒

③ 横井 八重子 (51) (広島市西区) 2時間23分14秒

Bコース (9km) 男子

① 伊藤 吉洋 (38) (トップギア広島 西区) 48分30秒

② 松永 健一 (39) (田布施最速倶楽部) 49分7秒

③ 高前 直幸 (38) (寺岡整形外科病院 福山) 49分10秒

Bコース 女子

① 広石 のぞみ (34) (津和野町) 1時間1分32秒

② 柿田 有理 (41) (山陰ランクラブ 大田市) 1時間2分35秒

③ Ridgwell Lee (36) (広島壮年走ろう会 南区) 1時間2分51秒

昨年不参加であった韓国大邱から今年は男子選手1名が参加し、しかも優勝という成績まで残し、広島・大邱両山岳連盟の交流を深めるうえで意義ある第27回の比婆山国際スカイラン大会となった。

前日5/25には22の連盟所属団体会員ならびに登山教室スタッフ・個人会員の皆様190名が参集して周到的な準備を終え、夕方からはアドバイザーや招待選手も含めて和気あいあいと登山フェスティバルが行われ、連盟会員相互の交流を深めるうえでも意義ある行事となった。(西部)

豊田理事長 (大会副会長) 挨拶 (解散式にて)

みなさん、本日はみなさんのおかげで、本大会を無事に終了することができました。ありがとうございます。みなさんの高いボランティア精神には、本当に頭が下がります。

天候にも恵まれました。みなさんの中にいらっしゃる強力な晴男、晴女の力によって、きっぱりと夏を連れて来ていただきました。逆に心配された熱中症はゼロ。幸いなことに、大量に準備した氷は、全部無駄になりました。けがは、捻挫が一名、軽微な傷が一名と少なく、幸運に感謝致しております。

先ほどから、さわやかな風が吹いております。これはどこから吹いてくるのだろうか？司馬遼太郎が、『空海の風景』の中で、空海の手紙を評して「人格の風韻が感じられる」と書いております。このさわやかな風は、みなさんの、高い精神のいただきから吹いてきます。

来年もこの風を吹かせるために、できましたら少しでも若い仲間を連れて参加してください。本日はどうもありがとうございました。



DVD 上映・招待選手/アドバイザー・表彰者紹介ほか



各会員自己紹介 1



各会員自己紹介 2



5/25 大会準備作業開始



準備終了報告・登山フェスティバル開始



5/26 選手受付/控所・開会式



スタート・ゴール・表彰



解散式・韓国選手団送迎会

山講習会」でも話題とした、2017年3月27日の栃木県高体連登山専門部主催の「春山安全登山講習会」における雪崩事故（高校生7名と引率教員1名が死亡）についての詳細な検証記録が出版された。阿部幹雄著『那須雪崩事故の真相—銀嶺の破断』（山と溪谷社2019年6月発行 1600円+税）である。

著者は1953年生まれ、北海道大学山スキー部のOBの方で、札幌市在住。現在は北海道テレビ放送の契約記者として、ドキュメンタリー番組などの制作を担当しており、この書籍と同タイトルのドキュメンタリー番組が今年3月にテレビ朝日系列で放送されている。著者はまた1981年5月の北海道山岳連盟ミニャ・コンガ（中国・四川省7556m）登山隊の隊員であったが、仲間8人を滑落事故で亡くし、自らもかろうじて救助されるという痛ましい体験をしている。そのことや、また北海道での雪崩事故に遭遇した体験から、雪崩教育や山岳救助に関するボランティア活動を熱心に行っている。

私がこの本のことを知ったのは、2年前の那須岳雪崩事故に関してFacebook等で私なりの意見表明をしていたところ、この那須岳雪崩事故の被災者で2時間埋没しながらもなんとか救助されたという生徒の保護者の方と繋がりができ、その方が最近この本のことを紹介していたからである。

那須岳雪崩事故については事故の半年後に、栃木県教育委員会が主宰する検証委員会によって詳細な報告書がまとめられ、事故の大要については理解していたが、この本の内容は検証委員会報告では不明であった部分をさらに究明しており、衝撃的とも言える内容を含んでいる。

一番肝要と思われるのは、8名の死亡者を出した1班（大田原高校）と、死亡者はいなかったものの負傷者が出た2班（真岡高校）、さらにそれに続く3班・4班が実際にどういうルートでどこまで登っていたのかをかなり正確に突き止めたことである。この本で明らかにされたところによれば、1班が到達していたのは、検証委員会報告で推定された地点（尾根の緩やかな斜面から急斜面に近づくあたり）よりもさらに上の急斜面の中ほどであった。（どうしてそんな所まで進んでしまったのだろうか…）

3. 書籍『那須雪崩事故の真相—銀嶺の破断』

紹介

（事務局長 西部 伸也）

昨年11月、高校登山部顧問の先生たちを対象に、当連盟より講師派遣という形で開催されたスポーツ庁と県教育委員会主催の「広島県登山部顧問等安全登

そして、2 班が取ったルート・行動もかなり究明されている。1 班よりは下にいたものの、2 班が尾根に出るまで取ったルートは 1 班よりもむしろ危険なルートと言えるし、さらには尾根に出てから沢の上部をトラバースするという危険な行動も取っている。

このような事実が明らかにされ、私が強く思ったのは、エリアやルート選択のミスもさることながら、中心的な顧問教諭の間の連携・意思疎通不足が致命的な結果をもたらしたということである。

1 班の講師で講習会の主任講師でもあった S 教諭 (所属は真岡高校) は確かに海外 7500m 峰の登山経験も持ち、栃木県登山専門部内でも一目を置かれていたようであるが、こと雪崩の危険度に関してはどのような認識があったのだろうか…。少なくとも S 教諭は元気な大田原高校の生徒たちが急斜面のさらに上部まで登っていこうとするのを引き止めることができなかった。もしかしたら S 教諭は、「自分はこの斜面は初めてだが、経験のある 2 班の講師の W 教諭 (前委員長で所属は真岡高校) が下から自分たちを見ているが特に何も言わない」ことで OK をもらったと判断したのかもしれない。

一方で 2 班の W 教諭は年齢も S 教諭よりは上で登山経験も長い、登山技術ということでは自分よりも S 教諭のほうが上と思いき、1 班の行動を黙認していたのかもしれない。

さらに事故当時山麓の本部で待機していた委員長の I 教諭 (所属は大田原高校) は、ここ数年は本部業務ばかりで実際の登山のことは W 教諭と S 教諭に任せきりのような状況だった。したがってこの日の各班の行動範囲についても、スキー場ゲレンデ上部の雪崩危険地帯を認識するだけで、スキー場ゲレンデ横の樹林帯急斜面とその上部の尾根の危険度について認識がなかったように思われるし、さらには各班が山中での行動中に連絡手段の無線機の元を離れるという痛恨のミスも犯している。

このように、中心的な顧問教諭間の連携不足が重大な結果を引き起こすことになってしまったのであるが、その根底には顧問教諭団の雪崩の危険に関する知識不足を否定することはできない。ただ、その知識不足があっても、お互いが連携を密にすることにより、

より慎重な行動がとれたのではなかろうかと思うと残念である。責任の多くはベテランの 3 人の教諭にあるが、他の若い顧問教諭たちも、不安があったとしたならそれを口に出しておくべきだったと悔やまれる。

ところで、顧問教諭たちの責任を不問にするのではないが、顧問教諭たちが危険を認識できなかった要因が当日の積雪状況ではなかろうか。確かに 3 月下旬としてはまれにみる大雪で、大雪注意報や雪崩注意報も那須高原一帯には発表されていた。しかしながら、1 日で 30 数 cm という積雪量は雪国では決して珍しいものではなく、30 数 cm 積もったからといって必ずしも雪崩は起こらない。

私自身、登山の中でもとりわけバックカントリースキーが好きであるから、シーズン中はほぼ毎週のように雪山に踏み入り、新雪や大雪も経験している。そして雪崩事故には敏感である。伝え聞く限りでしかないが、広島県で唯一の山岳雪崩遭難である 1968 (昭和 38、いわゆる三八豪雪の年) の内黒峠中ノ谷の事故、それから比較的近年の 2010 年大晦日の奥大山スキー場での雪崩事故 (パトロールの方 4 名が死亡)、2013 年 11 月 23 日の立山真砂岳大走りでの雪崩事故 (スキーヤー・スノーボーダー 7 名が死亡) は強く記憶にとどまっている。これらに共通するのは、いずれもかなりの大雪が積もった時の事故ということである。奥大山では 5 時間の内に 50cm の降雪があり、その日は海岸部の米子でも 80cm の積雪を記録して、国道 9 号線は大渋滞となった。立山では事故の前数日にわたって大雪が続き、当日の雪崩の破断面の厚さは 2m とのことであった。

一方、私自身、新潟県 (群馬県境) の平標山ヤカイ沢で自ら引き起こした小規模な雪崩に 10m ばかり流されたこともある。斜面は 40 度ほどの急斜面で、固く凍った雪の上に 15cm ばかりの湿雪が乗っているという条件であった (2012 年 3 月 18 日)。

また、ある程度深い新雪が積もる急斜面を滑降したという経験も何度かある。たとえば、2010~2011 年のシーズンはとても雪が多く (恐羅漢山では 3 月末でも山頂で約 2m、4 月下旬になっても中腹の 1100m までスキーができた)、深入山でも 1 月 2 月は常時 1m50cm の積雪がある年だった。そうして毎週末のように木が

ほとんどなく比較的急な深入山の様々なコースで膝下近くまでの新雪を楽しんでいたが、雪崩に遭遇したことは一度もなかったし、深入山よりももっと急な大山の沢 (6 合沢・7 合沢) を、やはり膝下近くの新雪の中滑ったという経験も 2 回ばかりあるが、そのときも雪崩の不安は特にはなかった (2011 年 3 月 3 日及び 3 月 27 日。3 月 3 日のときには 8 合目から 6 合目に向けて尾根を下っていて松島さん・岩内さんと出会う)。

そのようなことから、2016 年 2 月に自費出版した『中国山地のバックカントリースキーと高校登山部顧問の 30 年』の本文 2 ページ目、「バックカントリーを安全に楽しむために」と題した一節で雪崩の危険に触れた際、「雪崩については、急斜面で大量の降雪があるときにはその危険があると考えなければなりません。具体的には、40 度近い急斜面で数時間のうちに 50cm もの積雪があるようなときには非常に危険だと考えなければなりません」と書いたが、那須岳雪崩事故を知った今、この認識も少々甘いかと思っている。50cm まで行かずとも、30cm でも危険なことがあることを知らされたわけである。

では、雪崩がなく安全に滑れた時との整合性はどうなるのか。おそらくそれは降雪の状況ということになるのだろう。低気圧によってもたらされる弱層ができやすい降雪があったかどうか。そうした降雪があれば、たとえその上の積雪が 30cm 程度であっても甚大な被害を引き起こすことになる…。冬型気圧配置によってもたらされる大雪とは異なる、低気圧によってもたらされる弱層を形成する降雪とその後の大雪。栃木県教委が主宰して都合 7 回開催された検証委員会でも、第 5 回目の検証委員会 (7/23) において、科学者たちからこのことが提起されている。2014 年 2 月に関東地方や山梨県に大雪をもたらしたものがそれで、その際には雪崩被害も多く出たとのことだ (ちなみにその年は、5 月中旬になっても富士山吉田口 5 合目までたっぷりの積雪があった)。阿部幹雄さん自身も著書の中で、低気圧による降雪の危険にもっと注意を喚起してこなかったことを悔いている。

各班の登山行動をかなり正確に究明した著者はさらに、「雪崩が自然発生だったのか人為発生だったのか」という検証委員会が結論を出さなかった問題につ

いて、「雪崩は自然発生ではなく、人が斜面に入ったために発生した人為雪崩の可能性が非常に高い」と結論付けている。雪崩が発生する直前に近くで (下からも) クラックができるのを見たという生徒たちの証言からすれば、うなづける結論である。ただ、「人為」が 1 班の行動によるものか、2 班の行動によるものかは、2 班の教員・生徒から詳細な聞き取りができていないため断定できないとされている。2 班 W 教諭は自らの責任を取るためにも、詳細な証言をする必要がある。そうして 2 度とこのような事故が起きないように、自らの経験を次の世代への教訓として提供していただきたいと私は考える。



右のカラー写真は阿部幹雄さんの Facebook より。書籍中にも写真は豊富だが、いずれも白黒写真となっている

4. 広島県高校総体登山競技報告

6/1(土)~2(日)県民の森一帯において第 72 回広島県高校総体の登山競技が開催された。1 日目は熊野神社~竜王山~六ノ原の縦走コース、2 日目は六ノ原~毛無山~出雲峠~烏帽子山~御陵~越原越~六ノ原の周回コースで、審査隊選手は両日ともメインザック行動である。

参加校は男子 10・女子 5 で、男女とも出場の学校があり、また顧問のみの 1 校を含めて、全体では 12 校。参加人数は男子 103・女子 29・顧問/役員 28 の合計 160 名であった。

高体連登山部の大会では通常の登山に必要なとされる体力・知識 (気象や救急法など)・技術 (読図・設営など) の様々な項目が 100 点満点方式で採点されるが、今年の大会では次のような成績となった。

男子 ①修道 98.8 ②広島学院 98.1 ③基町 85.8
④五日市 81.1 ⑤高陽 79.3 ⑥呉三津田 78.9
女子 ①ND清心 99.3 ①基町 94.0 ③五日市 85.9

『県総体優勝について』

(ノートルダム清心高校山岳部 2 年 永山 遥、奥野 美優、角本 柚香、弘法 桜奈)

6 月 1 日、2 日の広島県高等学校総合体育大会登山の部にて、私たち 4 人は清心としては 8 年ぶりにインターハイへの切符を勝ち取ることができました。私たちが今回優勝できたのは、今まで支えてくださった先輩のおかげだと思っています。

先輩は昨年度、自主的に大会の下見やトレーニングを始め、ずっと努力されて昨年秋の中国大会で優勝されました。そんな立派な先輩に少しでも近づけるよう、私たちが中 3 の冬から準備やトレーニングを重ねてきました。大会の直前に私たちが不安なときにも、先輩は「結果は気にせず楽しむ」というアドバイスをくださり、そのおかげで終始リラックスして大会に臨むことができました。インターハイ出場は昨年先輩が惜しくも達成できなかった目標でもあるため、今回の結果を先輩方は誰よりも喜んでくれました。

また、今回一緒に大会に出たメンバーは中学生のときからずっと一緒におり、チームワークはどこにも負けない自信があります。トレーニングし続けるのは辛いこともありましたが、この大好きな仲間と一緒に頑張ることができました。かけがえのない仲間とだからこそ、最高の結果にたどり着けたのではないかと思います。今後の大会でも、最高の仲間達と一緒に楽しみながら頑張っていきたいです。

今後は、全国大会でも上位を目指し、より一層努力していこうと思います。これからも応援よろしくお願ひします！

最後になりましたが、先輩方はもちろん、支えて下さった顧問の先生、応援してくれた家族、学校の友人などには本当に感謝しています。ありがとうございました。

5. 中国五県自然保護研修会報告

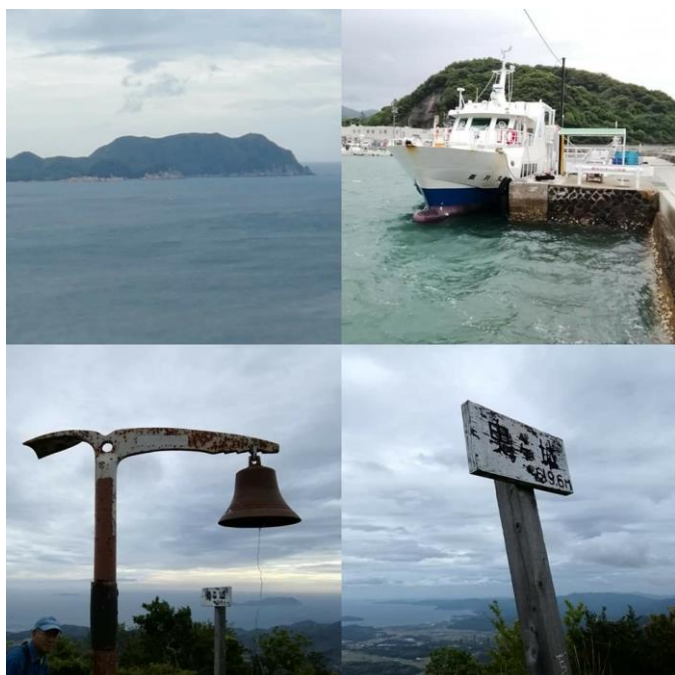
5 月 18 日 13 時、集合場所の吉見漁港蓋井島渡船乗り場に到着したが、台風のような強風のため、蓋井島への船が欠航。予定を変更し、鬼ヶ城山 (619.6m) 麓にある、下関山岳会の「くるみ小屋」を宿泊地に研修会を行うことになった。集合場所で、変更後の資料

を手渡されたので、その準備の良さに驚いたが、欠航はよくあることらしく、宿泊を予定していた蓋井島の民宿から「来ても帰れなくなりますよ」と言われ急遽代案の準備をしたとのこと。

まず、本州最西端の毘沙の鼻 (下関市) から、渡るはずだった蓋井島を眺めたあと、くるみ小屋から鬼ヶ城山山頂目指して急斜面を直登し、途中元寇の時に築いたといわれる石塁を見学。こんなに高い場所にまで、元寇の攻撃に備えていた事に驚く。この石塁を見るために上った急斜面は、足場が悪くとても難儀した。眺望の開けた山頂では、折からの強風に、孫悟空の筋斗雲のような雲が次々に接近しては去っていくという稀有な景色を見ることができた。登りに反し、山頂から下山に使用した石印寺コースは整備が行き届いており、快適だった。9 割の登山者がこのコースを利用しているとのこと。

くるみ小屋に戻り、山口県山岳・スポーツクライミング連盟井上祐自然保護委員長から、鬼ヶ城の歴史解説および蓋井島の自然について講義があった。それを現地で受講できたらと、悔やまれたが、井上氏の自然保護にかける情熱、また懇親会での山口県山岳・スポーツクライミング連盟のスタッフの皆さんおおもてなしの心に打たれました。ありがとうございました。

広島からの参加者 (敬称略) 山田雅昭、宇山茂之、福永やす子、小田里子、勝村博己、堀亀諭、豊田和司の 7 名 (文と写真 理事長 豊田 和司)



6. ひろしま山の日報告

(理事 福永 やす子)

第18回ひろしま「山の日県民の集い」は6月2日竹原をメイン会場に県下15市町15会場で一斉に実施され、各会場では森の手入れや地元ならではの企画が行われた。

メイン会場の竹原ではバンブー公園に有志が集まった。開会式後、さくらの新品種「舞姫」が植樹され、その後それぞれの企画に分かれて参加。市長も会員である竹原山岳会の里山ハイキングにAコース:健脚(約5km)東山稜線⇒鎮ヶ山山頂⇒高崎地蔵⇒会場とBコース:健康(約2km)高崎地蔵⇒鎮ヶ山山頂往復とがあり、Aコースを歩いたので紹介します。

当日は好天で東山稜線からは瀬戸内海に大崎上島、東邦亜鉛契島製錬所(昔は軍艦島?)、大崎下島を望みながら進み、岳連加盟団体である竹原山岳会の方々が整備された竹林を抜けて、昔、樟脳を採るために植えられた十数本の楠木の巨木を見ながら鎮ヶ山の山頂に登り休息。班ごとの記念撮影を済ませ高崎地蔵からバンブー公園会場へ到着。有志の方々のタケノコご飯と豚汁のおもてなしの食事を戴いた。この下山後のおもてなしの食事は絶品でした。関わった皆様大変お疲れ様でした。益々のご活躍をお祈りします。会員の手厚い企画は、ご一緒したたけはらケーブルネットの後日紹介されるとの事です。



(150名の集合写真はたけはらケーブルネット提供)



5. 岳連短信

1. 寄贈御礼

三原山の会『筆影』No. 471 (6月号)

福山山岳会『会報』R元. 6月号

広島やまびこ会『やまびこ』No. 758 (7月号)

2. 6~7月の行事案内

(集合時間・場所等の詳細は当連盟ホームページの「岳連カレンダー」のページを開き各行事をクリックすると確認できます)

6/21 夕~23 国体SC競技中国ブロック大会 (島根県 松江市 旧千酌小学校体育館・M-ウォール)

6/26 スカイラン大会打ち上げ (エールエール屋上)

6/29~30 無雪期レスキュー研修会 (「山のファーストエイド研修会」三次市 ほしはら山のがっこう)

7/6~7 岳連例会山行 (鳥取県大山)

7/20 SC中国地区ユース選手権 (鳥取県倉吉市)

7/21 県民ハイキング (三段峡)

編集部より

○この会報は、皆さんの提出原稿を編集して発行しています。岳連行事・山の情報・行事参加の感想など気軽にお寄せください。寄稿の場合は所属、役職を記入下さい。編集の都合で一部手直しすることがあります。ご了承ください。

○会員団体で会報発行されたら岳連事務局まで恵送下さい。随時紹介します。

○この会報はメール配信しています。配信ご希望の方は岳連事務局までメールアドレスをお知らせ下さい。